

## 阿部知二小説論

—『冬の宿』を中心に—

## 1

阿部知二のもっとも初期の作品に、東大文芸部の雑誌『朱門』に掲載された「化生」(大・14・10)や、「女像」(大・15・2)といった小説がある。もちろん彼が『主知的文学論』の著者として、あるいは新興芸術派系のモダニズム作家として、文壇にデビューする以前のものであり、まだ東大在学中の習作めいた作品に過ぎないと言えるのだが、しかし、これらの作品には、阿部文学のまだ磨かれていない原石のようなものが感じとられ、主知主義とかモダニズムとか行動主義とかいった文壇的符牒によってしばしば見誤られやすい彼の文学の本質が、かえって良くなるかかえて興味をひくのである。筆者はこれらの小説について、既に一度紹介的に述べたことがある①が、ここではもう少し踏みこんで、阿部文学の本質的部分を探る一

## 水上 勲

つの手がかりとして、あらためて取りあげたいと思う。

これら初期作品の特色を一言にしていえば、きわめて幻想的神秘的で、人間存在の深淵にのめりこんでいくような怪奇で美しいイメージが見られるという所にある。しばしばそれは抒情的にながれやすく、美的陶醉にひたりがちであるが、ともかく現実の正確な再現をめざす志賀直哉的なリアリズムとはまったく無縁に、頭の中でできる限り想像的イメージをふくらませ、そのイメージに人間存在の不安定な私たちを定着させていこうとする意図がはっきりと見とれる。ただ、そのイメージがかなりロマンティックな、憧憬的な感情の尻尾をひきずっているために、知的批判にたえられぬ弱さを持っている点は、欠陥として指摘されよう。しかし、こうした幻想的神秘的なイメージによって文学的主题を表現しようとすること自体は、当時の新感覚派の新しい芸術運動の精神とも結びつく、すぐ

れて斬新なものであったことは評価されてよい。

さて、「化生」は今の所、阿部知二の処女作とされている作品であるが、生物教師である「私」が小説家を志す甥に物語を語り聞かせるという、一人称形式をとっている。中心となる人物は、生物の標本を作っては学校や研究室に売りつける商売をしている不思議な老人である。この老人は商売とは別に、奇妙な情熱にとりつかれ、ある研究に熱中している。その研究とは、四生の説（卵生、胎生、湿生、化生）による生命の誕生を言う仏教の説のうち、湿生と化生の可能を信じ、それを実験によって証明してみせることであるが、現代科学ではひろく否定されるしかないこのような神秘的研究のうちこむ老人の異様な情熱に、「私」は嫌悪感を抱きつつも、心内では惹かれるものを感じる。老人はそんな「私」にまとわりつき、妻君に執着をみせたり、奇怪なふるまいで「私」を悩ませ、毎晩のように「私」は老人の悪夢にうなされる。ある日、老人が死ぬという使いの者の報せに驚いて、「私」は老人の家を訪ね、そこに異様な姿で死の床に横たわっている老人を見出だす。真紅な全身、口は耳まで裂け、髪は抜けおち、眼は半ば潰れ、鼻はおちてしまっている。老人は自らの肉体を実験台に、化生に成功したと信じて死んでゆく――。こうした幻想的な物語である。

一読してE・A・ポーを思わせる作品だが、人智を越えた神秘説

にとりつかれた異様な老人に、科学的理性を有しているはずの「私」が否応なく惹かれていくという設定には、人間存在の非合理的部分に対する作家の強い興味が感じとれる。その文学的出発からこのように理性を超えた神秘的幻想的なものにひかれる所があったということは、やはりその後の阿部文学を考える上で見逃せないことである。

「女像」においては、その幻想性はセクシユアルなイメージを伴って一層強烈に現われてくる。この小説でも、Tという青年が友人に手紙を書きおくるという一人称スタイルをとっており、この小説形式が彼の文学的発想ときりはなせぬものであることが考えられる。

その手紙のまずはじめの部分に、『美』や、『芸術』『思想』『学問』などの前提を脱することが出来ない『知』にはどうしてもわからない事があるものだ。ただ『人間の名に於て』味ふときだけ知ることが出来るのだ。そしてそれだけが真の愛の名に、又憎の名に価値する知である。」と記されており、作家の関心のありかをよく物語っている。

このTという青年「私」は「死と狂疾」の不安から東京を去り、故郷の山国の谷間の寺にひきこもって禁欲的な生活を送ろうとする。啞の寺男と二人きりで、訪れる人もない山寺に一冬を過ごすか、やがて春の訪れと共にその若い肉体は自然な性的欲望に激しくさいな

まればじめ、堪えられなくなった「私」は、本堂にひっそりと隠されてあった美しい裸体の女人像を見つけ、まるで生きた女性に対するかのようにその木像に激しく恋をし、愛撫する。その罪の意識と怖れとから、「私」は夜毎日毎悪夢にうなされ、次第に狂気じみていくが、ある日、その女人像の美しい乳房の上に誰か他人がつけた鋭い爪跡を見つけて、「私」は狂乱状態に陥いる。

この女人像にはいわれがあつて、信仰深い妻と尼僧との関係を疑つて妻を自殺させてしまった男が、供養のために彫つたものであつたことを「私」は後で知り、その男がこの木像を彫つたのは浄らかな仏像を作ろうとしたのではなく、美しい肉体の幻影にもてあそばれたのだと想う。そして「私」はこの木像を殺してしまう決心をするが、焼きすることも森の奥に捨ててしまうこともかなわず、思ひあまつて手紙のあて主である友人の許へ送る決心をしたのだと語る。「私」にとつてその木像の女人は現実なのか非現実なのか、そのさだめもつかず、もはや「私は実体と心の影とを区別する力を失つてゐる」と告白する所で終つてゐる。

激しい性欲とそれに伴う美的陶醉に翻弄されて、現実と非現実との境をも見失なつてしまつた青年の狂気じみた内面が良く描かれていて、「化生」よりも一段と完成された作品になつてゐる。このように、心の深奥に隠された非合理的な情熱にとりつかれた人間が、

蛾が火に吸い寄せられるように破滅の淵へとひきずりこまれていき、そこに幻想的美的な陶醉境がおのずと現出するというのが、初期阿部知二の小説のパターンであつた。今一つ、これは『文芸都市』に発表された「日本のじぶしい」(昭・3・8)を見てみよう。

これも「私」が少年時代の記憶を物語るといふ一人称形式をとつてゐる。ある荒涼とした北方の村が舞台であるが、そこでは「私」たち村人と山窩族の人々とは、子供どうしでも激しく対立し争つてゐる。ある時、冒険に出た「私」や乙松はその山窩族につかまり、松の木に縛りつけられる。彼等はその前で宴を始め、酒を飲み踊りまわるが、その中に一人、きわめて美しい娘がいた。縛られながらも「私」や乙松はその娘の野性的な美しさに陶然とする。宴が果つた後、皆が寝静まつた頃、その美しい娘はひそかに「私」の許にやつてきて、食物を与えたり、縛られたままの体を愛撫したり、自分の裸身を月光の下にさらけだしたり、自由にふるまい、「私」は倒錯的な喜びを感じる。しかし、そこへ村から救援の大人たちが現われて子供たちは救いだされ、山窩の人々は散り散りに逃げだすが、ただ一人乙松だけはその美しい娘の跡を追つたまま村に戻つてこなかつた——という物語である。

語り手の「私」はこれまでと同じインテリのタイプの青年であり、彼が知性の果てに広がる野性的本能的な世界に無限の憧れを抱くと

いうのは、あまりにロマンティックにすぎるけれども、性的欲望と結びついた激しい情熱によって身を滅してしまふ乙松に、やはり人間存在の制御しがたい暗い情欲の力が象徴されていると言えよう。

このように、初期の小説はしばしばポータブルな怪奇な幻想を伴い、ひ弱なインテリ青年の本能的野性的世界への憧れを持ち、エキゾチックな物語性を持っているが、その根底に人間的理性を超えた、存在の暗黒をかい問みせるような深淵的なものへの一貫した興味と関心がつらぬかれていることが見逃されてはならない。

こうした彼の関心は、昭和四年に入って書き出された『主知的文学論』<sup>③</sup>にもはっきりとうかがうことができるのだが、しかし、実作面においては昭和五年頃からモダニズム風小説に移行したこともあって、少くとも表面からはこうした特徴は姿を消してしまふ。阿部知二がこのモダニズムを通過したことについては、筆者は前稿でその意義を二点にわたって指摘しておいた。一つは初期小説にみられたあまりにロマン主義的な情熱過剰の抑制、その知的方法的処理の実験ということであり、今一つは同時代的社会的関心（非マルクス主義的な）の芽生えということである。特に後者（「白い士官」などに典型的な）は初期小説にはまったく見られなかったもので、しかも良く知られているようにのちの阿部文学の重要な柱となったものであり、彼がモダニズムを通過したことの最も大きな意義はこ

の点にあったと言つてよい。しかし、そのために彼本来の幻想的・神秘的・物語的な傾向が十分に生かされなかったということも否定しきれない。

さて、こうして一応実作の表面からは姿を消した人間存在の神秘性非合理性への関心と興味が、再び作品のうえに鮮やかに蘇ってくるには、昭和十年代の有名な問題作、阿部自身にとつても一時代を画した『冬の宿』（昭・11・11刊）まで待たねばならなかった。

この『冬の宿』についても筆者はこれまでに論じたことがあるが、<sup>⑤</sup>ここでは初期小説との関連性に焦点をあてて、更に深くこの小説の魅力の秘密に迫りたく思う。

## 2

実際、小説『冬の宿』には、何処か不思議に非現実的幻想的なところがあり、それがまたこの小説の独特の魅力を作っているといつていい。それは抒情的とも、ロマンティックとも言えるが、私には、この小説世界がはたして確かな現実世界なのか、それとも一場の悪夢のような非現実的世界なのか、そのあわいがはっきりしない所から生じてくるもののように思われる。外部世界と内部世界との区別がはっきりつきかねる所に生じるものと言つてもよい。ともかく、こうした特色はどのようにして生まれてきたのか、しばらく作品に

即して分析してみたい。

この小説の冒頭は、語り手の青年「私」がその記憶について語り出すところから始まっている。「……私の記憶はみな何かの季節の色に染まつてゐる。それは映画のフィルムの一齣づつがいろいろの色を持つてゐるやうなものであるが、その記憶のフィルムの色はいつも正直な暦の上の季節と一致してゐるといふわけではない。夏の日の出来ごとが秋の感覚を伴つて想ひ出されることもあり、秋のことが晩春の甘い色に染まつて想ひ出されることもある。」

読者はこうして最初から、不確かで曖昧な「私」の記憶の世界（季節の色によって抒情的に染められている）にひきずりこまれていくのである。このあと「私」の周辺の事情がしばらく語られ、次に、「私」が下宿先の霧島家をはじめ探してあるシーンが描かれるが、そこへ至る道筋はまるで迷路のように入りこんでおり、ようやく見つけた霧島家は、高い樺の木が黄金色の枯葉をいっぱい落しているその陰に、崖に寄りそうように、そこだけひっそり静まりかえった中にポツンと建っているという、奇妙に幻想的な風景として描かれる。

「私」はその家の貸間のはり紙を見て中へ入るが、そこへ出てきたまつ子は「渋く着い底光りをもつた地味な絹物」を着て、「彼女の白い円い顔、観音眉、黒い切長の眼、埴輪のやうに切れ込んだ口、

また、静脈が一々浮びあがつてゐるやうな白い手などの全体が、私には古い陶器の光沢、硬さ、色、冷やかさ、を思はせ」る。いかに神秘的な登場の仕方である。「私」は彼女に二階の部屋を案内してもらうが、その部屋を飾っているのは、古びた俳句の軸、燕尾服を着た嘉門の奇怪な半身像の写真、放恣に横たわる男女の姿を描いたマティスの版画、それにすぐ隣室のキリスト磔刑像である。これらの混乱した部屋飾りの印象も、やはりどこことなく非現実的なムードを漂わせる効果がある。このように「私」と霧島家（冬の宿としての）との出会い自体がひどく非現実感を漂わせ、何か遠い夢の中の出来事のように思わせるのである。

その日から数日後、「私」はいよいよ霧島家に引越すことになるのだが、その時には、周囲の景色は前に見た時とはまるで別のものではないかと思うほど変つてしまつてゐる。灰色の雲が立ちこめ、樺の木はすっかり葉を落として枯枝ばかりとなり、「私」を迎えてくれたまつ子の顔も一層白々と蒼ざめ、冷たく光を底に凍らせた陶器のように見え、部屋の中の飾りもマティスを除いて皆はぎとられている。冬の宿の印象をこのように一変させることによつて、読者の非現実感は一層強められていく。

このようにして「私」は霧島家の一員となり、嘉門とまつ子という一風変わった夫婦の葛藤の渦にまきこまれていくのであるが、語

り手の「私」が迷い、こむようにして『冬の宿』である霧島家に辿りつき、そこで奇怪な人間の葛藤の中にまぎこまれていくという設定は、発端としてはたいへん良くつくられた巧みな構成と言え、非現実的なムードを漂わせる効果を十分に挙げている。

さて、良く知られているとおり、「私」の眼の前に展開される複雑な人間の葛藤の中心をなしていたのは、夫の霧島嘉門と妻まつ子との間に生ずる霊肉相剋の図であった。嘉門はかつては名家の御曹子であったのが、放蕩に放蕩を重ねてあつという間に財産をすりへらし、今は守衛の身分にまで零落しているが、いが栗坊主の巨大な頭に太い眉毛、吊りあがって充血した眼玉に大きな口と四角い頑状な顎、いかり肩に厚い胸、ふくれた腹に大きな腰と脚を持つ、海坊主のような容貌魁偉な男として描かれている。その巨大な体軀にもかかわらず、性格的には本能的肉体的衝動にひきずられるまま破滅的な行為をくりかえすしかない無能力者であり、放蕩の限りを尽したあとで後悔しては子供ののように泣き叫ぶ、幼児性を脱しきれぬ男である。

一方、妻のまつ子は先に見たように、冷やかかなところのある女であり、これまで散々夫に苦勞させられた所から狂信的なクリスチャンとなっている。夫に対しては酒、煙草はもちろん、自分の体に触れることも許さず、あくまで禁欲的な生活を強いている。そのた

め夫から暴力をふるわれることも始終だが、その度に一層信仰を深めるだけで、夫の肉欲的衝動を決して許そうとはしない。また、生活の艱難辛苦にもかかわらず、容色は衰えきっておらず、気品も失っていない。最後まで夫と別れることを拒み、といって夫に妥協するのでもなく、ひたすら信仰にすがって受難の日々に耐え続ける女性として描かれる。

こうした奇怪というしかない夫婦の激しい相剋図が、語り手の「私」の眼を通して描かれてゆくのである。「私」は大学生、伯父の家に寄留していたのが、その華美な空気に嫌気がさし、友人が左翼に走っては次々検挙されるのを見てショックを受けたこともあり、一人で下宿生活をするつもりで、この霧島家に住みつく。前稿でも指摘したように、語り手の「私」の存在は、この小説において重要な役割を果たしている。初期小説にみられたように、一人称形式は阿部知二が最初から好んで用いてきた手法であったが、ここでも大きな効果を挙げている。すなわち、嘉門やまつ子という人々は見えてきたとおり、一種の異常性格者というしかないのだが、それが「私」のプリズムを通して描かれているため、「私」自身の内部世界の出来事のように感じられ、「私」が人間性の深淵に潜む巨大な化け物を見てうなざれているような印象を受けるのである。もし、この「私」というプリズムをはずしてみるなら、嘉門やまつ子はたまた

ち存在感を失って、ただのエキセントリックな異常性格者、性格破産者というに終ってしまふであらう。それが「私」の「心の生地の断面図」として、「私」の内部の人間として描かれているために、読者はこの嘉門やまつ子という存在を自分自身の内面的象徴として受けいれることができるのである。

かくして、嘉門やまつ子は、それぞれ「私」の内部の人間性の深奥に根を持った存在と言わねばならない。それは統一された調和的人間性をもはや持つことができず、一方は極端に霊的精神的なものに、一方はその対極の肉体的本能的なものに分裂させられてしまっている現代人の心の断面図である。冬の宿全体が、こうした人間性の非合理的部分の象徴となっているのである。先にみた、冒頭の、迷路を辿りつつ冬の宿へむかっていた表現は、まさに人間存在の深淵へ向けての、作者の手探りしながら進んでいく手付きをそのままに現わしているのと見ることができよう。

この小説が霊肉の葛藤という観念的な主題を扱いながら、機械的形式的な弊をまぬがれ、ある深みを感じさせるのは右のような理由によると思われる。嘉門やまつ子は、それぞれ「私」の内部の人間性を極大化し、巨大な怪物にまで発展させたところに生まれた存在であり、単に観念の奴隷であるのではない。この小説全体が「私」の体験した「巨大な悪夢」という印象を与えるのも、そのせいであ

らう。「私」は「私」の内部の世界にさ迷いこみ、そこで制御しがたい本能の衝動に身をひきずられるかと思うと、厳しい禁欲的な忍耐強い精神の力にもひきつけられる。作者はそうした内面の矛盾や葛藤自体に深甚な興味を抱いているのだ。それが初期小説以来、ずっと持続されてきたものであることは、あらためて言うまでもないであらう。

このように『冬の宿』という小説は、嘉門、まつ子、「私」を中心に、他にも在日朝鮮人高や、「私」の恋人庵原はま江、剣持講師、霧島家の輝雄咲子の兄妹などをそれぞれ個性的に書きわけ、本格小説としての構成をとりながら、冒頭のシーンがそうであったように、しばしば小説中に幻想的場面をおここむことによって、十九世紀的リアリズム小説には見られない独自の効果を挙げるのに成功している。

その幻想的な場面において、怪奇醜悪なイメージの中にもどこか美しいものをしのびこませている点も阿部知二の特色である。彼の幻想には抒情的、ロマンティックな陰影が、必ずといっていいほどつきまといっている。例えば、この小説のクライマックスとも言える場面——霧島家に同居していた朝鮮人高が、勤め先の慈善病院が放火で焼失したのち（実は高は放火犯の一味であった）姿を消してしまったのを、まつ子と「私」が二人であちこち探しまわる場面があ

る。洲崎のはずれの埋立地の荒涼とした枯野に、モヒ患者を收容する粗末な掘立小屋が立ち並ぶ中を、二人は高を訪ねあぐねた末、まっ子は疲労から気を失って倒れてしまう。近くのカフェで、女給の助けを借りて「私」は彼女を介抱するのだが、その時、女給がまっ子の着物を胸のあたりまでくつろげるのを見て、「まっ子の胸が、ほとんど乳房のあたりまで、匂ふやうに白く浮き出し、年増女が身をゆすぶるたびに、かすかに波うつのを、しびれるやうな心で盗み見」し、何か恐しい夢にうなされるやうな心苦しさにかられる場面は、陰惨な荒んだ風景をバックに、怪しい美を持った、セクシュアルな幻想が読者をとらえる。

嘉門についても、はじめ「私」が彼と猥談をかわす場面で、かつて画商をしていた時に集めておいた裸体の女の絵を、妻に見つけられみな取りあげられて、焼かれてしまった時、めらめらと裸女の体が火に焼けるのを見てたまらない興奮を感じたと、恍惚とした表情で「私」に話しかけ、「私」は思わず気味わるくなるというシーンなど、倒錯した嘉門の官能性が幻想美の中に巧みに溶かしこまれている。

この二人に限ったことではなく、他の登場人物においても幻想的な美的なシーンが重要な場面でみられる。嘉門夫婦の子供である咲子が、吹雪の夜に使いに出て帰るに帰られず、迎えにいった「私」

の手でやっと助けられたものの、その後肺炎をおこして長く病床につき場面があるが、その時咲子の耳が異常なほど鋭敏にときすまされ、とても聞こえないようなかすかな音まで聴きわけて皆を驚かせる場面なども、非現実的な美しさに満ちている。また、「私」の恋人はま江が、重症の結核患者であるのに、嵐の夜サナトリウムを抜け出し、見舞いに訪れた「私」の居るホテルへ忍びこみ、生命の危険をかえりみず、狂気のように互いの肉体をむさぼりあうシーンなども、ひどく幻想的で印象に残る。こうした場面を積み重ねていくことによって、小説全体が現実と非現実との、また内部世界と外部世界との奇妙に混濁した世界のように感じられ、「巨大な悪夢」のような印象を与えるのである。

以上、『冬の宿』の持つ幻想性、非現実性について見てきたが、むしろこの小説の意義はそれだけに尽きるものではない。一方でこの小説は、本格小説的骨格を持ち、思想性・社会性にも事欠かない小説である。特に、よく指摘される在日朝鮮人高の扱いは、作者の鋭敏な社会意識をもっとも良く物語るもので、プロレタリア文学系以外の小説家の中ではもっとも社会性の濃厚な小説家であった作者の面目がよくあらわれている。また、前稿で指摘しておいた剣持講師にみられるヒューマニズム思想も、こうした社会性に関連して注意すべきところであろう。『冬の宿』は、全体が「私」による



『巨大な悪夢』の如き印象があると先に記したが、その巨大さの中にはこうした客観的な社会性も同時に含まれているのである。更に言えば、この小説が書かれた昭和十年代という時代そのものがまさに悪夢のような時代だったのであり、その混沌とした世相がこうしたかたちで『冬の宿』に反映した、と言えるかもしれない。人間存在の深淵をうかがわせるような、目眩く幻想的な感覚と、十年代の社会的混乱が生んだ精神的危機感とが、互いに交錯したところに生まれた稀有な作品と言えよう。

『冬の宿』のこうした独自の性質は、阿部知二の次の長篇、『幸福』<sup>⑦</sup>と比べてみた時、一層明瞭となる。以下、ごく簡単に両者を比較検討しておきたい。

『幸福』において『冬の宿』の「私」の役割を果たしているのは、公荘一である。しかし、公荘は「私」と違って、もう中年の域に達しかけた分別盛りの知識人であり、彼の眼前に現われては消えていく青年群像が彼を通して描かれるという点は『冬の宿』に等しいが、両者の間には「私」と嘉門、まつ子との間にみられるような内的連関性が乏しく、公荘一は「私」よりはるかに傍観的であると言わねばならない。また、最初から終りまで、公荘一による一貫した一人称形式が貫かれている訳でもなく、途中鬼頭兵馬という青年の手記がところどころにはさまれている。そのことも、公荘一と登場人物

たちが表裏一体のものとして見られない理由になっている。

さて、公荘一の眼前に出現する三人の青年が『幸福』の中心人物である。鬼頭兵馬、阿久津玄理、公荘無量といういささか変わった名前の青年たちであるが、この内、兵馬は嘉門的、玄理はまつ子的に設定されていると言ってよい。この二人は公荘一の友人、クレイポウルが国外に追放されることになった時、公荘が世話を頼まれた青年たちであり、二人とも貧しい育ちの苦学生である。鬼頭兵馬は頑健な肉体を持ち、持ち前の馬力で苦学を重ねて大学まで進んだ人物であるが、性格的にはまったく融通がきかぬきまじめ人間で、滑稽なほど謹厳実直な、一風変わった人物である。周りの人々の同情をひく所があって、どうにか無事卒業にまでこぎつけたのに、卒業直後、突然自殺する。そのかなり変った性格といい、突然の自殺といい、人間性の謎を感じさせる人物であるが、どうしても作られすぎているという感が否定できない。もう一人の阿久津玄理は、不具者であるが、頭はきわめて良く、不具の体をむしろ武器にして、巧みに女性の関心と同情をひき、うまく取り入っては出世を狙う、野心的な青年として描かれている。公荘一に対しても、明らかに利用する目的でのみ近づいていくのであり、そうした面で兵馬のナイヴすぎるほど善良な性質とは対照的な小悪党に作られているが、こうした兵馬と玄理との間に激しい対立葛藤が生ずる訳ではなく、

公莊にとってこの二人の対照的な青年が持つ意味も今ひとつはつきりしないままである。『冬の宿』の嘉門・まつ子夫婦には見られた厳しい相互否定がこの二人にはまったく見られないことは、この小説から迫力を奪いとってしまった大きな原因であろう。

最後の公莊無量は一の異母弟にあたる青年だが、ここでは彼自身よりも、彼が故郷で見出だした農民画家、須坂三吉が重要である。<sup>⑤</sup>

都会的、根無し草的なひ弱さを持たず、ひたすら原始的な生命力を素朴にカンバスに表現しようと努める三吉にうたれ、無量は兄の一人のような無為徒食的インテリ生活を見限って、東京のとある下町の小学校教師となる。この須坂三吉、及び公莊無量の生き方に、作者はもつとも力を入れていると思われるが、一種モラリスティックな面が先に立ちすぎて、これらの人物も必ずしも成功しているとは言えない。兵馬や玄理のかなり奇矯な性格に対し、三吉や無量はあまりにまっとうすぎ、彼らの間に互いに有機的に交流するものがないのである。

こうして『幸福』の中心をなす青年たちが、互いにバラバラで一されることなく、いささかつくり物めいた感じを与えるのは、やはり語り手の公莊一の傍観性によるものと考えられる。公莊一と青年たちとの間に内的な交流が見られず、従って『冬の宿』のように、「私」が嘉門、まつ子夫婦の争いを自分の心の断面図だと感ずるよ

うな関係はここにはない。更に、『冬の宿』ではきわめて重要な部分を占めていた幻想的な場面や美的抒情的な場面も、ここではきわめて少なく、ただ兵馬や玄理のエキセントリックな性格と行動だけが浮きあがってしまう結果になっている。『冬の宿』においても、一歩あやまれば嘉門やまつ子は単なる異常性格者に転落する恐れはあった。それが一定の存在感を持つに至っているのは、くりかえし言うように、彼らが「私」の内面の象徴たりえていたからであり、そこにおのずと幻想的性格が生じていたからである。そうした傾向は『幸福』では発展させられずに終っている。その真の原因は、『幸福』という小説がその題名にみられるように、あるモラリッシュな青年の生き方を描こうとして、そのために観念性が表に出すぎたためであると思われる。その点、むしろ『北京』のようになつぷりとエキゾティシズムを湛えた作品、または『旅人』のような幻想的情緒あふれる作品の方がすぐれた作品になっているのである。こうして見た時、阿部文学の持つこのような幻想性や物語性、抒情的な美しさは、彼の文学の本質をなすものとして、もっと注目されてよいと思われる。

(この論文は拙稿『阿部知二論覚え書』の一部をなすものであることを、お断わりしておきます。)

(注)

- ① 拙稿「阿部知二論覚え書(一)」(昭・57・3 『帝塚山大学論集』36号)  
阿部知二の東大英文科の卒業論文は、E・A・ポーであった。
- ② 刊行されたのは昭和五年十二月である。
- ③ モダニズム風作品の最初は、昭和五年一月の「日独對抗競技」(新潮)である。
- ④ 拙稿『『冬の宿』試論』(昭・58・9 『昭和文学研究』七集)  
そうした批評が存在することも前掲論文で触れておいた。十返一、宮本百合子らの評である。
- ⑤ 昭和十二年十一月、河出書房「書き下ろし長篇小説叢書」第四巻として刊行された。
- ⑥ この二人の青年のことはのち「野の人」(昭・15・4 『中央公論』)に改めて作品化された。